今月の谷口雅春先生のお言葉

子供は親の心の「鏡」である

子供は親の心や言葉によって損なわれる

多くの子供たちは、親がまちがった心の波を起こし、まちがった言葉の波を起こしているために非常に損われているのであります。多くの人たちは、子供を愛するあまりに悪しきことばかりを見つけて、「お前はここがわるいのだ」ということを始終言うのであります。そう言われるとその子供は萎縮してしまいます。そういう子供は、たとい勉強は辛うじてよくできたにしましても、大いに伸びるということはできないのであります。「勉強しろ、勉強しろ」と言わなければ勉強しないから、やむをえず「お前はそんなことではできないから勉強せよ」と言うのだという人があるかもしれませんけれども、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖のように言うと、いくら勉強してもかえって心に憶えないのであります。これはまたおかしい現象でありますが、原理は簡単です。「勉強せよ、勉強せよ」と言うような親は、子供に対してどういう心の態度をとっているかといいますと、「お前はできがわるいのだよ」という考えを懐いているのであります。できるに定まっておれば、「勉強せよ」とは申しません。「できがわるい」と信じているから、「勉強しろ、

勉強しろ」とこう言うのであります。

（『生命の實相』頭注版第30巻12～13頁）

「うちの子供はできが悪い」と思ってはならない

「うちの子供はできが悪い」と、言葉に出さなくとも、心に念うだけでも一つの波を起こすことであります。親または教育者が、心の中で、「この子供はできがわるい」という精神波動を起こしまして、その子供をそういう心で見つめているかぎりは、その子供は決して学習がよくできるものではありません。勉強室にいまして、勉強しているような真似をしておっても、心は親の心で縛られておりますから、勉強が愉快でないのであります。そういう場合には、勉強室に坐っておりますと、なんとなしに窮屈な、縛られたような感じがいたしますので、その窮屈な中にいるのではのびのびと生命が生長しませんから、そこでいくら勉強しても深く心に愉快が刻まれるということがないのであります。そのためにせっかく勉強しても能率が上がらないのであります。

（『生命の實相』頭注版第30巻13～14頁）

親自身がよき心を起こし、よき行ないを

われわれの心というものは目には見えませんけれども、無数無限の印象や観念が心の世界に蓄積されているのでありまして、それが類似の「縁」によって引き出されただけが発現することになるのです。ですから、親というものは子供の心に種子を蒔く人であると同時に、子供の内に埋蔵された種子の芽を吹かす「縁」を与える人にもなるのですから、できるだけ自分がよき念波を起こし、よき行ないをして自然に模倣せしめるという行ないをしなければならないのであります。

（『生命の實相』頭注版第30巻80頁）

子供は親の言葉の通りに現れる

実験心理学の実験に於て、皆さんの前に一様に水を入れたコップを入れておいて私が水を飲めば、皆さんもその通りに水を飲まれる。それと同じく親が心に怒れば、その通り子供の形に現れて来るのです。これを児童の模倣性と申しております。親が夫婦喧嘩をしているのを子供の時に見せておくと、子供が成人して大人になると同じように夫婦喧嘩をするようになるのであります。子供を叱る場合などでも、皆さん反省して御覧になれば、きっと、自分が子供の時、親から叱られた通りの言葉をいって子供を叱りつけている事実に、みずから愕然として驚く事があるのであります。それは知らず識らずの中に心の中に蓄積された観念が、長い年月を経ても失われずに現れて来るのであります。そう考えると、何事でも悪い手本は迂濶には見せられないと思わせられるのであります。

（新編『生命の實相』第22巻44頁）

子供の完全円満な実相を見て賞めましょう

子供は最も多く母親のなすこと、いうことの影響を受けるのでありますから、母親の性質とか心持、態度というものが子供に最も多く現れて来るのであります。でありますから、皆さんがお子さんにもっとよい性質がほしいと思われたら、先ず自らを省みて自分がよくなって頂くことが肝腎なのであります。

子供というものは、「お前は悪い悪い」と叱ってもなかなかよくなるものではありません。常に善い方面を見るようにして、悪は見ずに、子供の完全円満な実相を見るようにして、それを賞め言葉で誘導していれば必ずよくなって来るのであります。それからこれは先程も申しましたが、私が水を飲むと、皆さんも無意識に一緒に飲まれる、というのと同じことで、命令や吩咐よりも、行いで手本を示されますと、子供は直ぐその真似をするものでありますから、常に子供によい実例を示し、常によき行為の模範になることが大切であります。

（新編『生命の實相』第22巻71～72頁）